

善光寺海外留学僧派遣育英会『論文集』 発刊

まさくに菩提樹の若芽

——留学僧の使命脈々と——

「宗祖を通して釈尊に還る」を信念とする横浜市の曹洞宗善光寺住職黒田武志氏が、同寺の開創十五周年を記念する報恩事業として、世界に活眼を開く人材育成を目指す「善光寺海外留学僧派遣育英会」を設立してから、この一月でちょうど八年目を迎えた。海外に留学僧を派遣し、あるいは海外から日本への留学僧を援助する育英事業を昭和六十年から毎年継続している。一月には第八回の育英生として五人を採用、二人の継続を発表、これによって育英生は世界十カ国・四十人を数えることになる。

このほど中外日報社の編集・印刷により同育英会から刊行された『論文集VOL・1』は、過去七回の育英生三十四人が応募時に提出した論文を集め、育英会の歩みと将来、理事長である黒田住職の対談や講演などを合わせて一冊にしたものである。論文テーマは「禅の国際化と私の役割」や「二十一世紀の仏教と私の役割」あるいは「タイの仏教に学びたいこと」「未来社会の仏教」などで、それぞれに仏教者として生きる理想に燃え、海外での留学体験や実践を通じて、社会に何を果たすべきかの使命を考える

眞摯な姿勢に貫かれている。

これには曹洞宗大本山永平寺の丹羽廉芳貫首、同大本山総持寺の梅田信隆貫首、山田恵諦天台座主、東京大学名誉教授の中村元東方学院院长(以上は善光寺育英会名誉顧問)、立正佼成会の庭野日敬開祖、ロサンゼルス禅センターの前角博雄主管(善光寺育英会顧問)が序文を寄せ、「育英会の歩みと将来」を千葉県柏市・龍光寺住職の佐藤俊明常務理事、「育英会の将来について」を駒沢女子短期大学副学長の東隆眞理事が執筆。上智大学の安齋伸教授の随想『理想具現』の実例に学ぶ」や黒田住職と庭野立正佼成会開祖との対談、黒田住職がフランス・パリ第一大学での第二回日仏セミナーで行なった講演「新しい教化路線を求めて―十五年の軌跡とその成果―」などを収載する。

中村元東方学院院长は同書刊行の意義について、次のように語っている。

「善光寺育英会の経過について、いささか存じております。黒田住職が非常に力を入れて、高い理想をもって始められたものです。そこに寄せられた論文は生き生きとしており、若い人々の活気が漲っています。その情熱において、きわめて内容の高いものと思えます。

論文は、これまで善光寺の機関誌『成寿』等に発表されたものですが、機関誌自体が一寺院の刊行物としては大変ユニークで、文明評論的な内容も含んだ、アトラクティブな(注目すべき)ものと言えます。東方学院の若い研究者にも発表の機会を与えてもらい、各自がそれぞれ違った角度から自分の感想や体験を述べております。これも仏教界としては珍しいことでしよう。

このような事業は、本山や宗派がなさるのならわかりませんが、一つの寺院がこれを継続していくことは大変な努力の伴うことです。そのこ

とに大いに感嘆している一人です。育英会の若い人々が、世界に眼を向けて新しい知識と体験



を吸収し、菩提樹の若芽のように未来に向かって成長されるよう期待いたします」
A五判、三〇八頁、頒価一、五〇〇円、善光寺（横浜市港南区日野町一六〇四）刊。